

両側顎下腺唾石症の1例

内田啓一, 黒岩博子, 長内 剛, 塩島 勝

松本歯科大学 歯科放射線学講座 (塩島 勝教授)

唾石症は顎下腺に好発する唾液腺疾患の代表的なものであり、とくに片側性に発生することが多い。

今回、両側性顎下腺唾石の1例を経験したのでそのX線写真を供覧する。

患者は67歳女性、1986年本学にて左側顎下腺唾石症の診断のもとに唾石摘出術を行った。その後、とくに症状なく経過していた。2000年8月頃より左側顎下部の違和感を認めたため、同年9月26日、同部精査目的のため本学を受診した。初診時の現症としては、左側顎下部の腫脹、圧痛および顎下リンパ節の腫脹はとくに認めなかった。断層方式パノラマX線写真において、左右下顎角部の顎骨と重積するように類円形の米粒大の不透過像を認め、さらに左側下顎前歯部付近の歯槽頂部にも同形の不透過像を認めた(写真:1)。咬合法X線写真においては、右側顎下腺導管開口部付近および顎下腺相当部の口腔底において不透過像を認めた。とくに、顎下腺相当部においてはいくつかの石灰化物と思わせる不透過像が重なる所見を呈していた(写真:2)。同部をさらに精査するためにエックス線CT検査を行った。両側

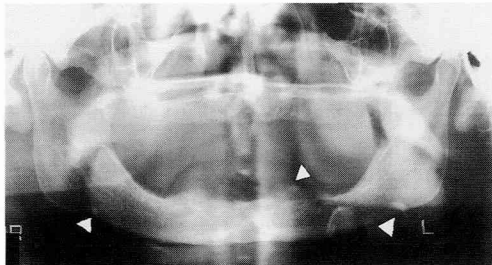


写真1:断層方式パノラマX線写真。左右下顎骨および左側下顎前歯部付近の歯槽頂部に石灰化物を認める。(△印)



写真2:咬合法X線写真。顎下腺開口部付近および顎下腺相当部に唾石様の構造物を認める。

顎下腺排泄管移行部および右側顎下腺体開口部付近に唾石を思わせる high density structures を認め、両側顎下腺体の形態はやや萎縮を伴い不明瞭であった(写真:3)。

唾石症は通常片側性に発現し、顎下腺にみられることが多いとされている。わが国におけるいくつかの報告においても90%以上が顎下腺管あるいは顎下腺体内に発生している^{1,2,3,4)}。また両側性に発現する頻度は、0.4~2.2%とされており^{1,2,3,4)}、本症例は比較的正常な症例と思われた。

唾石の発生要因には様々な説があり、本症例においては、患者は比較的高齢であり、また唾石摘出の既往もありそのため唾液腺の萎縮、および唾

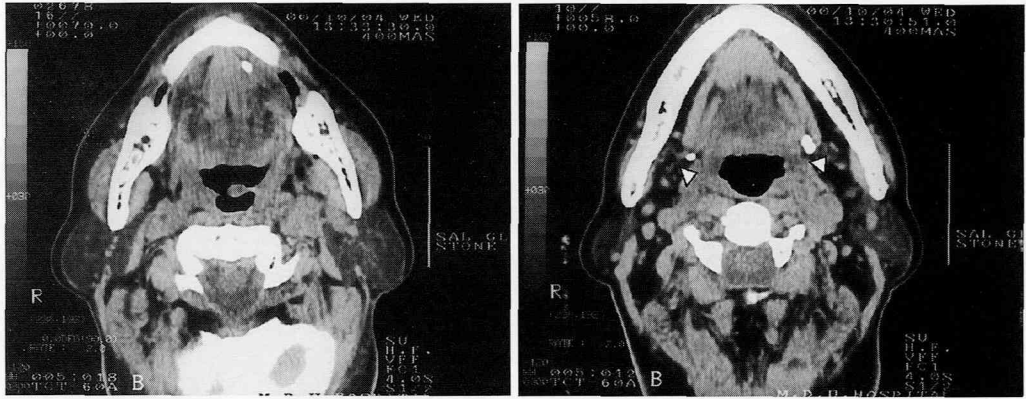


写真3：エックス線CT画像。両側顎下腺排泄管移行部，右側顎下腺導管開口部付近に唾石を認め両側顎下腺体の萎縮(△印)を認める。

液流出量が減少し唾液の停滞がおこり，唾石の発生しやすい環境下にあったものと推考される。

文 献

- 1) 大前岳人，今井隆生，安部 厚，松尾隆昌，石田洋一，北村旅人，吉田憲司，栗田賢一(1999) 多数の唾石を認めた両側性顎下腺唾石症の1例。日口診誌 **12**：186-9.
- 2) 丸岡 豊，杉山芳樹，湊 秀次，朝比奈泉，榎本昭二(1983) 両側顎下腺腺体内に多数の唾石を認めた1例。日口外誌 **39**：475-77.
- 3) 川本洋子，尾崎登喜男，領家と夫，民本和子，小川隆嗣，浜田驍(1982) 当科でみられた唾石症および静脈石に関する臨床的検討。日口外誌 **28**：416-23.
- 4) 浜本宣興，本間尚子，石原博史，半田公彦，渡辺八重子，中島民雄(1990) 唾石77例の臨床的検討。日口外誌 **36**：599-606.